

年の激甚化する自然災害とその後の回復力が求められていることを反映して「3. Campus Safety：安全・安心・レジリエントなキャンパスの実現」とした。

また、これらの基本整備方針は、文部科学大臣が2021年3月に決定した、第5次国立大学法人等施設整備5か年計画における「あらゆる分野、あらゆる場面で、あらゆるプレイヤーが共創できるイノベーション・コモンズ（共創拠点）の実現を目指す」という基本的な考え方に合致するものとなっている。

第2節 柏の葉キャンパス

第1項 園芸学部附属農場柏農場の開設

千葉大学は1987年、松戸地区の園芸学部附属農場市後尻地区約2.2haの用地の代替として、柏市十余二（現在の柏の葉6-2-1）の柏通信所跡地に約25haの農場用地を取得した。当初、約30haで調整が進んでいたが、約5haを県立高校用地として使用してもらうこととなり、このため敷地形状が変更された。これが千葉大学柏の葉キャンパス（名称使用2007年以降）の開設になる。園芸学部は1991年に附属農場校内農場を廃止して柏市に移転させ、名称を附属農場柏農場とし、附属農場事務部をおいた。1992年、柏農場の拡充整備計画は完了した。この時期の活動については、『千葉大学五十年史』の記載を参照されたい。この当時の航空写真（写真1-5-2-1および写真1-5-2-2）を示した。東側（写真の上側）にはゴルフ場が広がっている。



写真1-5-2-1 1989年のキャンパス周辺



写真1-5-2-2 1992年の柏の葉キャンパス

出典：国土地理院ウェブサイト (<https://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1>)

第2項 文部科学省への移管

1987年から千葉大学の東京大学生産技術研究所用地取得希望により園芸学部の西千葉移転についての討議が始まったことに伴い、柏農場用地をその財源として充てる検討が進められ、1997年から柏農場の移転候補地をはじめ、その将来構想について種々の討議が開始された。多方面との協議の結果、2001年、将来構想案として柏地区健康福祉介護センターと医工学センターが正式に位置づけられ、柏農場用地25haのうち、1/3程度(8.3ha)を東京大学柏IIキャンパスの設置のため文部科学省に移管することが決まった。2002年には、残った柏農場用地(16.7ha)に都市環境園芸センターと、医療・看護系の環境健康科学センターを設置することが検討され、文部科学省との折衝の結果、2003年に園芸学部附属農場を廃止し2センターを1つに統合した千葉大学共同教育研究施設 環境健康都市園芸フィールド科学教育研究センター(2008年環境健康フィールド科学センターに名称変更)が開設された。このセンターは千葉大学として国立大学法人化前の最後に設置された部局である。事務部として園芸学部附属農場事務部がフィールドセンター事務部に改組された。2004年、センターの管理研究棟、加工実習棟が新設され、農場中央運営棟、実習作業棟、温室等が移設された。併せて、大型特別機械整備費(平成15年度補正予算)により、国内大学で初の高度化セル成型苗生産利用システムが導入された。この時期まで、学内ではまだキャンパスとして位置づけられておらず、事務的に柏地区と扱われていた。

第2項から第3項の当時の航空写真は写真1-5-2-3および写真1-5-2-4のとおりである。キャンパスは柏市の要望や東京大学との最終折衝の結果、柏の葉高校北側に16m幅の通路を通す形となり、その結果、整備された圃場が斜めに分断される、と

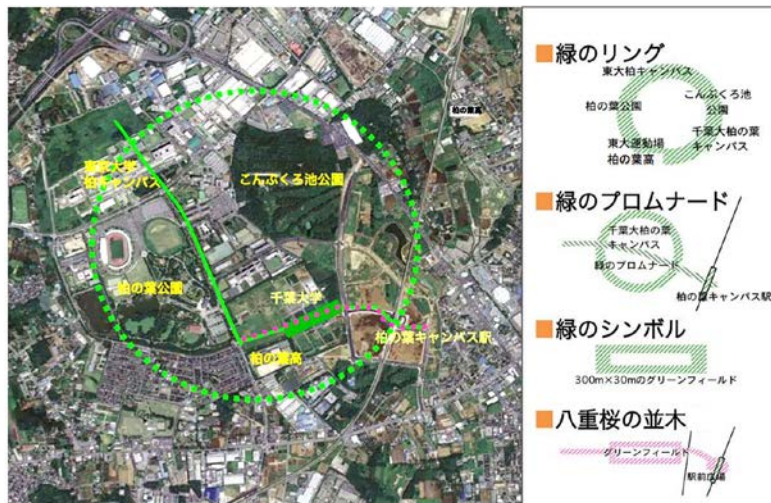


写真1-5-2-3 2007年のキャンパス周辺



写真1-5-2-4 2018年のキャンパス周辺

図1-5-2-1 国際キャンパスタウン構想



いう利用が制限される形状になったが、それを前提とした上で2005年にキャンパス整備企画室が、柏の葉キャンパス整備の基本方針を立案した。併せて、16m通路に沿ったグリーンフィールドや桜並木を形成することが柏の葉国際キャンパスタウン構想に盛り込まれた。(図1-5-2-1)。2012年にはキャンパスマスタープランにも記載された。この16m幅の部分についてはどのように利用するのか、将来的にどのような通行形態にするのか、2023年4月現在も各所との調整が続いている。

第3項 柏の葉国際キャンパスタウン構想

2005年のつくばエクスプレス柏の葉キャンパス駅開業以降、周辺環境は劇的に変化し、居住人口が急増した。千葉大学は柏の葉アーバンデザインセンター (UDCK) の構成員として、柏の葉国際キャンパスタウン構想検討委員会に加わり、地域に関わってきた。この中で、環境健康フィールド科学センター、予防医学センター、柏の葉診療所・鍼灸院は、地域社会と連携した様々な活動を通じて貢献してきた。詳細はそれぞれの部局に関する記述を参照いただきたい。ここでは大きな動きを示す。2007年に予防医学センターが設置され、研究棟が建設された。それまで環境健康フィールド科学センターで行われていた「ケミレスタウン・プロジェクト」を始め、柏の葉キャンパス地域での予防医学に関わる市民と連携した取り組みが展開された。

2008年には、松戸・柏の葉キャンパスの西千葉移転問題が再燃したが、財政的に

不可能との結論が出たため、これら2キャンパスの存続が決まった。

2009年に農林水産省の植物工場拠点事業により、環境健康フィールド科学センターに総面積13,350㎡の太陽光、人工光植物工場が建設され、企業との共同研究、研修、見学などが開始された。2010年には、古在豊樹前学長（当時）を理事長として、この事業の共同研究の調整、研修や見学の運営を行うNPO法人植物工場研究会が設立された。

第4項 キャンパス南側の貸与

2018年12月に秋山浩保柏市長（当時）が徳久剛史学長に面談し、16m幅の通路を市道として利用したいとの要望を正式に申し入れた。これに対して、千葉大学は歩行者専用道路としての利用を前提として、前向きに検討することを約束した。市道については、キャンパス西側8.3haを東京大学が使用を始めた2004年頃から「八重桜の並木道」構想と並行して、通行形態と合わせて、様々な検討が各所で進められてきた。一方、2016年に東京大学は、柏IIキャンパスの利用について、それまでの国際学生村構想から、大学全体のAI、情報拠点とし産業総合研究所を招致する方針に大幅変更した。この流れで、2019年から産総研柏センター、東京大学産学官民連携施設に加えて、東京大学情報基盤センターなどの建物が柏IIキャンパス内に続々と建設されることとなった。このような周辺環境が激変する中で、今後通行の利便性を高めていく必要があるとの判断と、通路によりキャンパスが南北に分断されることから、それまで環境健康フィールド科学センター管理研究棟、柏の葉診療所鍼灸院、予防医学センター研究棟、薬用植物園、圃場やケミレス施設群、などが配置されていたキャンパス南側の有効利用が学内外で検討されるようになった。その中で、イギリス・ラグビースクール法人の日本進出に伴う、ラグビースクールジャパン（RSJ）用地としての貸与の希望が出され、折衝の結果、2023年9月の開校

図1-5-2-2 キャンパスマスタープラン2022



を目指し、これに伴う様々な連携・協力を行うことを目的とした基本合意書が千葉大学とRSJの間で2021年7月に締結され、用地の貸与が確定した。この決定に時間がかかったため、RSJの開校予定までに校舎建設工事の竣工を間に合わせる必要から、キャンパス南側の機能移転の準備期間が短くなった。機能移転は2022年秋以降に開始され、予防医学センター研究棟機能は西千葉キャンパスに、柏の葉診療所は墨田サテライトキャンパスにそれぞれ移転し、環境健康フィールド科学センター管理研究棟、柏の葉鍼灸院は北側キャンパスの防風林地帯に建設された仮設建物に2023年1月に仮移転を実施した。並行して、薬用植物園は規模を縮小して移設、キャンパス南側の圃場及びケミレス施設群は廃止された。第4項の時期（2023年4月現在）のキャンパスマスタープランを図1-5-2-2に示した。

第5項 将来展望

今後（2023年以降）の千葉大学柏の葉キャンパスがどのように発展していくのかは、地域と連携した大学キャンパスをどのような活動で充実させていくか、このキャンパスでの教育研究活動が持つ意義をどのように広報していくかが鍵を握ると言える。加えて、周辺環境の整備と人口増加、柏の葉国際キャンパスタウン構想の進展の中で如何に千葉大学の存在感を出していくか、常駐する学生をどのように増やすかなど、インフラへの投資による整備と併せてソフト面の継続的な充実が必須となる。また、キャンパス南側を貸与したRSJと大学がどのように連携していくかについても、大きな課題である。



写真1-5-2-5 2023年4月のキャンパス周辺